

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目： グレゴリオス・パラマスの身体観—東方キリスト教的人間観の研究—

氏名： 袴田 玲

本研究は、14世紀のビザンツ帝国に生きた東方キリスト教を代表する修道士、神学者にして後のテサロニケ大主教、グレゴリオス・パラマス (c.1296-1359、以下パラマスと表記) の思想における身体観 (すなわち、人間の身体とイエス・キリストの身体に関する思索) を考察することにより、「東方キリスト教的」人間観を解明することを企図している。

本研究が対象とするのは、キリスト教の中でも、東ローマ帝国からビザンツ帝国を通じ、ギリシャやシリア、またロシアをはじめとするスラヴ諸国で今日まで豊かに息づく東方キリスト教 (とりわけ東方正教会) におけるヘシュカスム ἡσυχασμός の伝統である。ヘシュカスムとは、東方キリスト教の修道制において発展した祈りと観想の方法、およびその思想を意味する。修行者は孤独と静寂^{ヘーシユキア} ἡσυχία のなかで<イエスの祈り>と呼ばれる短い祈りを絶えず唱え、それを通じて魂を浄化し、神と一つになること (神化^{テオーシス} θεώσις) をめざす。その源流は原始キリスト教時代に砂漠で修行した師父たちにまで遡るが、ビザンツ帝国時代末期には、この祈りに座法や呼吸法といった身体技法を採り入れた実践がアトス山 (現ギリシャ共和国北東部、ユネスコ世界遺産) で盛んになった。狭義には、当時このような修行を実践していた修道士のことをヘシュカストと呼ぶ。彼らは修行を極めたさきに神と一つになり、またその際に神を光として見る恩恵に浴すると主張した。彼らの実践と主張のキリスト教的正統性をめぐり、帝国を二分する事態にまで発展したヘシュカスム論争 (1337-51) において、ヘシュカストを擁護するために聖書と師父の東方キリスト教的伝統に根ざしてヘシュカスムを解釈し、思想的に支えたのがパラマスだったのである。

そもそも、キリスト教にあっては、神の受肉、イエス・キリストの身体における死と復活、聖体拝領など、身体的主題が強く表れる反面、身体は人間の欲望や罪と結び付けられ、否定的に捉えられることも多い。また、ヨーガや座禅のように、その実践の中で身体を積極的に活用する他の宗教と比較すると、キリスト教の実践における身体の活用は消極的で、むしろ意識を身体的活動から遠ざける方向の努力が奨励されることもある。そのような点からすると、ヘシュカスムはキリスト教において「異質」な事例である。しかし、それゆえにこそ、この「異質」な実践や思想をそれまでのキリスト教の伝統に組み入れるべく論陣を張ったパラマスの思想においては、人間 (およびイエス・キリスト) の身体そのもの、身体と魂の関係、靈的完成への道行きにおける身体の役割等々、身体やそれを通じた人間存在そのものについての根本的な反省が加えられ、それらについての東方キリスト教的理解が提示されている。このような見解に基づき、本研究はパラマスの著作原典の精緻な読解をその中心に据えた。

先行研究の問題点との関連で本研究の内容を示すならば、以下のようにまとめられる。

まず、これまでのパラマス研究では、ヘシュカスム論争の中で彼が提示した「神の本質^{ウーシフ} οὐσία と働き^{エネルギア} ἐνέργεια の区別」に関する神学上の問題に議論が集中し、そもそも論争の発端となったヘシュカストの祈りの方法やその中で身体の在り方に関するパラマスの思索に十分な光が当てられて来なかった。また、ヘシュカスムというより広い視野に立ったこれまでの研究においても、インドのヨーガやイスラームのスーフィズム、仏教の称名や座禅など他宗教における修行法との表面的類似を指摘するにとどまるものが多く、東方キリスト教修道制の成立から 14 世紀に至るまで、その内部でヘシュカスムの祈りの方法が確立されていくさまを具に追った成立史研究こそあれ、ヘシュカストの祈りの方法がいかにして東方キリスト教的に解釈され、意味づけられ、根拠づけられていったのかという点は明確に示されてはこなかった。そこで本研究は、パラマスの主著『聖なるヘシュカストのための弁護 Λόγοι ὑπὲρ τῶν ἱερῶς ἡσκαζόντων』からヘシュカストの祈りの方法についてのパラマスの釈義を取り上げ、その基となる彼の身体観と併せて考察を加えた（本論第一部）。それにより、パラマスが新旧約聖書や東方キリスト教世界の先人たち（とくに偽ディオニュシオス・アレオパギテース）のテキストに依拠しながらヘシュカストの祈りの技法を思想的に支えていることを明らかにした。その中で、靈的完成のためには知性^{ヌーヌ}νοῦς を身体から引き離さねばならないと主張する論敵に対し、パラマスが身体はそれ自体として悪ではなく、魂の浄化を妨げるのはむしろ「身体の内に住まう悪しき想念」であるとして、神の創造した人間身体の根本的善性を擁護していること、また、靈的なものと物質的なもの、魂と身体といったものが区別はされても分離はされず、むしろ両者のあいだには或るつながりが存在し、そのつながりこそが魂の浄化に励む修行において身体技法を有効ならしめるものであると考えていることを示した。

ここで重要なのは、孤独と静寂を旨とするヘシュカストの修行にとっても、典礼、とりわけキリストの身体に与る秘跡である聖体拝領(エウカリスティア)への定期的な参与が不可欠であるとパラマスが考えている点である。これまでの研究の中で、ヘシュカストの修行形態は共同体を前提とする典礼(教会)生活とは相容れないものとされ、ヘシュカストには共同体の枠組みからはみ出る逸脱者ないし宗教的エリートというイメージが付きまとっていた。しかし、本研究では、パラマスにおける聖体拝領の実践を、その著書『キリストによって定められた十戒、あるいは新約聖書の法 Δεκάλογος τῆς κατὰ Χριστὸν νομοθεσίας, ἥτοι τῆς νέας διαθήκης』や弟子であったフィロテオス・コッキノス (1379 年没)による『パラマスの生涯 Λόγος ἐγκωμιαστικός』から読み解き、パラマスがアトスやその他の隠遁所で孤独な修行生活を送っていた時期にあっても、土日には修道院の共同体へ戻って聖体拝領に与っており、むしろ極端な隠遁生活によって典礼をないがしろにするヘシュカストを非難していたことを明らかにした（本論間奏部）。ビザンツ帝国内の修道院における数々の『修道院規則』から推し量るに、当時の修道士たちは奉神礼に参加しても聖体に与る頻度が低く、多くは年に数回程度であった。この点に鑑みると、パラマスの聖体拝領への執着

はむしろ当時の一般的な修道士よりも強いとすら言える。

典礼(とくに聖体拝領)を人間の完徳の道行きにおける必要不可欠な要素として重視する姿勢は、パラマスがテサロニケ大主教として過ごした晩年にその多くが著された『講話集 *Ὁμιλία*』において一層色濃く見受けられる。その修道士や神学者としての側面に議論が集中し、パラマスの司牧者としての側面を看過しがちであったこれまでの研究に対し、本研究では、アトスを離れ、ヘシュカスム論争を経たパラマスが大主教として街の一般信徒に接する中で形成していった人間理解(およびそれ以前のものとの差異)に着目し、『講話集』の分析を行った(本論第二部)。『講話集』の分析から明らかになった彼の聖体拝領論には、聖体拝領によって使徒とキリストの関係を超越する親密かつ直接的な合一が信徒個人とキリストの間に確立され、また信徒同士がキリストのからだにおいて一つとなり、共同体的交わり実現させるとの見解が認められた。さらに、『聖なるヘシュカストのための弁護』においては合一の具体的体験(光や熱や甘さといった感覚的な要素を含む)に重点が置かれていた神化(神とに人間の合一)が、『講話集』の中ではとりわけ聖体拝領において実現するものとして語り直され、その神秘的要素を残しつつも、救済概念に重ねられてゆくことも確認された。パラマスにとって、神の法を守り、絶えざる祈りを通じて自らの犯した罪を悔い、魂を浄化することがいわば「修道的生」なのであり、それは孤独の中に生きる修道士のみならず、すべての信徒に推奨されている。つまり、パラマスの思想において修道生活(修道的生)と教会生活は二つの対立する生活様式ではなく、双方相俟って人間の救いへと通じる生き方とされており、それぞれの中で実現される神との個人的・垂直的關係性と共同体的・水平的關係性はまさに聖体拝領において交差する。人里離れたアトス山で孤独の内に修行するヘシュカストから、司牧者としてテサロニケの街の一般信徒の救いに心を配るようになったパラマスの人生の転換点は、まさにヘシュカスムの歴史の転換点でもあり、ヘシュカスムが近現代世界においてその裾野を一般信徒にまで広げる要因となったといえよう。

要するにパラマスは、13-14世紀に隆盛した特殊な修行形態とその主張によって極端に限定される傾向にあったヘシュカスムを——そしてその主軸をなす神化概念を——、その「身体の哲学」によって再び人々の前に披いたのだと本研究は結論した。証聖者マクシモスやそれ以前の教父たちが描いてきたような宇宙論的広がりをもつ神化概念を取り戻し、そこに一般信徒をも改めて参与させることで、ヘシュカスムの伝統が現在にまで息づくことを可能としたこと、言い換えるならば、ヘシュカスムと神化概念それ自体を普遍化ないし民衆化(vulgarisation)したこと、ここにパラマスの思想的意義を本研究は見出す。18世紀末に出版された東方キリスト教の師父たちの詞華集『フィロカリア *Φιλοκαλία*』編纂の意図が、司祭や修道士だけでなく巷間に生きる一般信徒も絶えず祈りにとどまり、各人が自らの救い=神化を見据えて浄化のわざに励むことを訴えることにあり、その意味で修道院世界と俗世界の境界線を乗り越えることであったとするならば、彼ら編纂者たちの精神の萌芽はすでにパラマスの身体を通じた人間理解において認められるのである。